

## 公演をめぐる断想

大宮（埼玉県さいたま市）のイオンモールで初めて正月の獅子舞を見ました。山間地に生まれ育った私は、平地の稲作にかかわる神事や芸能をずっと目にすることがなかったのです。

獅子が口を動かし、大黒様が打ち出の小槌をふる姿に、「ああ、上手に周囲の穢れを食べている、一生懸命に福を蒔いている、授けている」とかなり感動しました。と同時に、もう、こんな場所では穢れの払いと福招きや福授けはできないのだろうと思いました。

私の仕事場である狭山市（埼玉県）は、山間の信仰と平野の神事がぶつかり合っている場所です。獅子舞をしている人たちは疫病の払いを担っている、どうもそんな気がします。獅子舞には山犬の獯猛さと神聖さがあるのでは、と私は思っています。

それに対して、やはり神楽やお囃子は、稲作と深くつながっている気がします。所作も一定の緩いリズムがあって、田植えや草取りの様子が私の目に浮かんできます。

＊

せっかくいただいた公演解説プログラムですが、まだ十分に読んでいません。そんな中で、掲載記事を話題に出すのは恐縮至極なのですが、観世流能楽師の方が、神楽と能や猿楽の関係を書いてくださっていました。二つの意味で全く私も同感でした。

一つ目は、リズム（呼吸？謡？）にすべてが秘められているということ。根底にあるのは、田植え歌であり稲作作業なのです。

私たちは、日々の生活に幸せを願います。だから、祈りも生活に根差したリズムになるのではないのでしょうか。いうならば、神楽という芸能は、生活に根差した「芸農」だった。そして、その願いに損得勘定はありません。

求めるダイヤの大きさがそうであるように、値段が願いの強さを決めます。かつて、平地の生活は稲作がすべてでした。だから、為政者が神事に関わる費用を相当に担ってくれました。庄屋だったり、将軍だったり。祈りをめぐる経済に関与していたのです。

かつて岩槻（埼玉県さいたま市岩槻区）に「民俗博物館」（埼玉県立民俗文化センター）がありました。民俗芸能を生きたまま残そうとした場所です。最もお金持ちのひとりの「お役所」が出資者でした。

私は、民俗博物館が現代の祈りの場になってほしかった。伝統芸能の心の支えの場になってほしかった。

神楽に魅力を感じる人々がいるのは、日本人（人間？）の心の中に、稲作（農業全般）とその生活が息づいているからではないでしょうか。心は、生きることとつながっていないと、疎外される気がしてなりません。

二つ目ですが、今回の公演では、多くの新しい試みを見ることができました。しかし、新作神楽であっても、神楽のリズムは崩されていないことに気づきました。学生スタッフの息吹が、「江戸里神楽公演」に新しい風を入れ、公演内容を変化させたのでしよう。より芝居がかったり、幕間にポップスが入ったりと神楽が祈りの芸能から少し娯楽的になったことは否めませんが、私はそれを否定するつもりはありません。清水さんのご発言、『日本の「伝統」とは、昔にとどまることではない』という基本姿勢に全くその通りだと思ったからです。

最後になりましたが、今後の「里神楽公演実行委員会」のご発展を願っております。

（川越市在住 K. T）

#### \*実行委員会からの追記

文中の清水さんとは、観世流能楽師・清水義也氏のことです。「里神楽公演に寄せて」と題したコラムを『第九回公演解説プログラム』（149ページから150ページ）に掲載させていただいております。